

<資料Ⅳ-3-1 通訳案内士研修用資料 沖縄県立博物館（1/13）>

沖縄県立博物館・美術館 通訳案内士研修資料

平成23年1月26日(水) 14—16時

順序	項目	展示室
1	「古我知原貝塚の暮らし」:縄文時代の沖縄	総合
2	「さまざまなグスク」:12世紀～15世紀	総合
3	「繁栄への布石 第一尚氏」「王統の交代 第二尚氏」:琉球王国の王統と組	総合
4	「冊封と進貢」:琉球と中国、交易	総合
5	「出土した陶磁器」:交易の具体例	考古
6	「江戸への琉球使節」:薩摩の琉球支配と王国	総合
7	琉球の美:琉球王国で発達した美術工芸	美工
8	「ペリー提督の琉球踏査」「護国寺の鐘」:王国の衰亡と琉球をとりまく国際情	総合
9	「琉球から沖縄へ」:日本への編入	総合
10	「沖縄戦 失われた文化財」	総合
11	「基地と復興」「アメリカ統治下のオキナワ」	総合
12	「新生沖縄県」:本土復帰	総合

通訳案内士ガイド説明資料

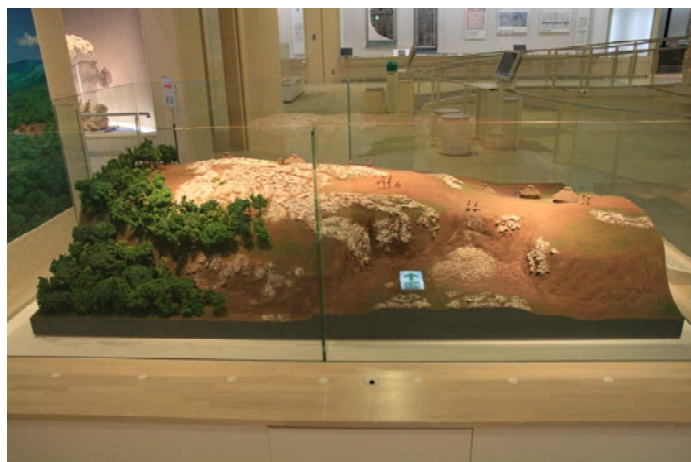
順序: 1

項目:「古我知原貝塚の暮らし」

提示資料:遺跡の復元模型

説明内容:

- ①古我地原貝塚は、縄文時代中期(約5500～4500年前)末～後期(約4500～3200年前)の遺跡
- ②沖縄島中部のうるま市石川で発見された。
- ③遺跡からは竪穴式住居・火を焚いた場所・ゴミ捨て場や、土器・石器・貝製品・骨製品などが見つかった。
- ④模型は、発掘調査の成果をもとに当時の生活の様子を30分の1の大きさに復元した。
- ⑤模型で再現されている生活の様子には、次のようなものがある。
木を伐っている ゴミを捨てている 料理をしている イノシシを捕っている
集会をしている 水を汲んできている 犬と遊んでいる 土器をつくっている など
- ⑥当時の人たちは、動物や木の实、魚、貝などを食料としていた。
- ⑦動物の骨や貝殻は、アクセサリーや道具の材料としても使われた。



備考:

趣旨:先史時代の生活の様子を知る。

補足:①模型のそばにある風景画は、遺跡の上空から南の方向をみた実際の風景である。

②模型の中に出てくる土器・石器・アクセサリーなどが、近くの展示ケース内に展示されている。

その他:①遺跡は1983(昭和53)・1984年に発掘調査された。

②調査した理由は、高速道路建設予定地内に遺跡があり、工事によって遺跡が失われることがわかったからである。

<資料Ⅳ-3-1 通訳案内士研修用資料 沖縄県立博物館（3/13）>

通訳案内士ガイド説明資料

順序:2

項目:「さまざまなグスク」

提示資料:座喜味城跡・知念城跡・浦上アリモリ遺跡・下田原城跡の模型

説明内容:

- ①グスク時代(12世紀頃～)になると、農耕や海外交易が行われ、地域の有力者が互いに勢力争いをするようになる。やがて山北・中山・山南の3つの勢力に分かれ、三山時代(14世紀頃～)となる。1429年、中山王の尚巴志が三山を統一する。
- ②琉球列島には200以上のグスクがあり、大きさや形・機能は様々である。
- ③座喜味城跡
 - 1 高い城壁を持つ（防御性が高く、戦争をイメージさせるグスク）
 - 2 城壁を上から見ると波形のカーブを描いている。
- ④知念城跡
 - 1 城壁を持ち、場内に御嶽(うたき)がある（聖地としての機能を持つグスク）
- ⑤浦上アリモリ遺跡
 - 1 城壁はないが、丘陵上にあり、敵の侵入を防ぐ堀切(ほりきり)がある（城壁を持たないグスク）
- ⑥下田原城跡
 - 1 小さな区画に分かれていて通用口で行き来できる構造（宮古・八重山諸島に多いグスク）
 - 2 物見台のような場所がある。
 - 3 グスクではなく集落だという説もある。



備考:

趣旨:グスクには様々な大きさ・形・機能があることを知る。

- 補足:①座喜味城跡…沖縄県中頭郡読谷村にある。護佐丸が山田城跡の城壁の石を運んで築城したと言われる。世界遺産に登録されている。
- ②知念城跡…沖縄県南城市にある。知念按司歴代の居城。国指定の史跡。
- ③浦上アリモリ遺跡…鹿児島県奄美市にある。平家の落人伝説が残る。現在は神社が建っている。
- ④下田原城跡…沖縄県八重山郡竹富町の波照間島にある。国指定の史跡。
- ⑤グスクは主に14世紀～15世紀頃に造られた。

その他:模型は、実物の200分の1の大きさである。

通訳案内士ガイド説明資料

順序： 3

項目：「繁栄への布石 第一尚氏」「王統の交代 第二尚氏」
：琉球王国の王統と組織

提示資料：「第一・第二尚氏王統図」のパネル、「明孝宗勅諭 琉球国中山王尚真王宛」、「尚真王御後絵」のパネル、「辞令書」、「聞得大君御殿雲龍黄金簪」などの道具類、「伊平屋の阿母加

説明内容：

- ・「3.王国の繁栄」のところで解説を始める。
- 琉球はかつて大きく三つの国に分かれていましたが、1429年に尚巴志によって統一王国が成立しました。(注1)
- 琉球王国の王統は、「第一尚氏王統」と「第二尚氏王統」の大きく2つに分かれます。
 - *「第一・第二尚氏王統図」のパネルを指す。
- 尚巴志の父親である思紹王から7代目の尚徳王までを第一尚氏王統と呼びます。各国王は、明(中国)との冊封・進貢(朝貢)関係を推進し、密接な関係を保ちました。それにより、東アジアの交易拠点となった琉球は、日本や朝鮮との外交に力を入れ、文化導入も図り、王国の繁栄を築きました。
- 時代は少し下がりますが、1487年に明(中国)の孝宗より琉球国の尚真王あてに送られた勅諭が残されています。(注2)
 - *「明孝宗勅諭 琉球国中山王尚真王宛」を指す。
- 第二尚氏王統は、第一尚氏王統の7代目にあたる尚徳王のあとに王位についた金丸(のちの尚円王)から、琉球王国最後の国王となった19代目にあたる尚泰王までの約400年間にわたる王統です。
 - *「第一・第二尚氏王統図」のパネルを指す。
- 3代目にあたる尚真王は、王国の中央集権化を進め、統治体制や身分制度を確立し、王国の基盤を築きました。
 - *「尚真王御後絵」のパネルを指す。
- 次に、琉球王国の組織体制を紹介します。
- ・「王府による島々の統治」へ移動する。
- 琉球王国の組織は、国王を頂点として、そのもとに上級・一般役人が勤務し、政治や行政などを行っていました。中央・地方の各役職は、国王の名において任命されていました。
 - *「辞令書」を指す。
- 琉球王国の組織の特徴は、豊作祈願や航海安全などの祭祀を行う神女たちも、国王によって任命されていたことがあげられます。ここでは、祭祀に使用する道具などが展示されています。
 - *「聞得大君御殿雲龍黄金簪」などの道具類を指す。(注3)
- ・「伊平屋の阿母加那志」へ移動する。
 - *「伊平屋の阿母加那志」を指す。
- 「伊平屋の阿母加那志」とは伊平屋という地方にいた高位の神女です。祭祀を行うときには白い衣裳を身にまとい、その後、このような姿に着替えたといわれています。

備考：

- 注1) 三つの国とは、「北山(山北)」、「中山」、「南山(山南)」のこと。
- 注2) 勅諭とは、中国皇帝が直接下した言葉のことを指す。
- 注3) 聞得大君とは、琉球王国の神女組織の頂点に君臨した役職のこと。おもに、国王の姉妹が就任していた。

＜資料Ⅳ-3-1 通訳案内士研修用資料 沖縄県立博物館（5/13）＞

通訳案内士ガイド説明資料

順序： 4

項目：冊封と進貢

提示資料：「PCコンテンツ」奉使琉球図、「進貢船模型」、「海上交易図(15～16世紀)」のパネル、「旧首里城正殿鐘」

説明内容：

・「進貢と進貢貿易」のところで解説を始める。

○冊封とは、中国の皇帝から国王として任命されることです。1368年に明が成立してのち、中国皇帝は、周辺諸国と冊封関係を結びました。琉球は、1372年に明との冊封関係をスタートさせました。

○中国皇帝に属した国家が、臣下として貢納品を納めることを進貢または朝貢といいます。これらの貢納品を中国皇帝へ届ける役目を担ったのが進貢使でした。琉球の進貢使は総勢約200人で、那覇港から東シナ海(東海)をこえて福建(初期は泉州)にたどり着き、北京まで片道約3,000kmの旅をしました。

* PCコンテンツ「奉使琉球図」の冊封使の道程を表示する。(注1)

・「進貢船模型」の前に回りこむ。

○進貢使が乗り込み、中国皇帝への貢納品を載せた船のことを「進貢船」といいます。船のメインマストには「進貢」と書かれた旗が掲げられていました。

* 「進貢船模型」を指す。

○進貢船が航海する際は、2隻から4隻で船団を編成していました。展示している進貢船模型は、約10分の1に縮小した模型です。もとは、長さ約30m、幅8m、帆柱の長さは約30mもある大型船でした。

○船の周囲にある装飾には様々なものがありますが、おもに航海安全を願った飾りだと考えられています。

○琉球が中国皇帝へ贈った貢納品には、琉球産の硫黄や馬だけではなく、日本産の刀や工芸品、東南アジア産の香辛料などが含まれていました。琉球は、日本や朝鮮、東南アジア各国へ船を運ばせ各地の品物を入手して中国へ運び、中国で入手した陶磁器などの品物を各地に運ぶ、東アジアから東南アジアをまたにかけた交易を行っていました。

* 「海上交易図(15～16世紀)」のパネルを指す。

・「旧首里城正殿鐘」のところへ移動する。

○ここに、ひとつの大きな銅鐘があります。これは、寺院などに設置されて時を知らせるための「梵鐘」というものです。この銅鐘は、「旧首里城正殿鐘」という、1458年に第一尚氏王統の6代目・尚泰久王の命によって造られました。

○お腹の部分(「池の間」)には文字が刻まれています。

○(刻まれた文字を指しながら)この銘文には、おおよそ「琉球は南の海にある素晴らしいところにあつて、朝鮮のすぐれたところを集め、中国や日本と非常に親密な関係を持ち、日中間にある理想の島であり、船を操って万国の架け橋となり、珍しい宝がいたるところに満ちている」ということが刻まれています。(注2)

○琉球が海外交易にかけた強い気持ちの表れた銘文であるといえます。

備考：

○注1)冊封使は、中国皇帝から派遣される使者のこと。琉球から中国皇帝へ派遣される進貢使と逆のルートであることに注意する。

○注2)ポイントとなる文字は、「琉球国」、「三韓」、「大明」、「日域」、「舟楫」、「万国之津梁」となる。

・「琉球国」=琉球王国

・「三韓」=朝鮮

・「大明」=明(中国)

・「日域」=日本

・「舟楫」=舟・船の楫(かじ)

・「万国之津梁」=万国(多くの国)の架け橋

通訳案内士ガイド説明資料

順序:5

項目:「出土した陶磁器」

提示資料:高麗系瓦、陶磁器類

説明内容:

- ①琉球王国は、中国や朝鮮半島・東南アジアの国々と交易を行っていたことが、遺跡から出土する陶磁器からわかる。
- ②朝鮮半島産の陶磁器については、14世紀～15世紀に作られた象嵌(ぞうがん)青磁が出土する。
- ③遺跡から出土する屋根瓦は、形や文様・製作技法の違いから、1「高麗系瓦」・2「大和系瓦」・3「明朝系瓦」に分けることが出来る。1・2・3の順序で製作が開始された。
- ④高麗系瓦の特徴
 - 1 他の瓦に比べて大形
 - 2 平瓦の表面に「癸酉年(みずのととりどし)高麗瓦匠造」などのスタンプがある。「癸酉年」については諸説あるが、1273年説が有力。
 - 3 軒瓦の文様は、蓮華文が多い。
 - 4 13世紀～15世紀頃に作られた。



備考:

趣旨:朝鮮半島と沖縄との間に交易があったことを示す。

補足:象嵌(ぞうがん)・・・表面に文様を刻み、その部分に別の土を埋め込む技法。

その他:

<資料Ⅳ-3-1 通訳案内士研修用資料 沖縄県立博物館（7/13）>

通訳案内士ガイド説明資料

順序: 6

<p>項目:「江戸への琉球使節」 :薩摩の琉球支配と王国</p> <p>提示資料:「尚寧王御後絵」のパネル、「琉球使節の主なルート」のパネル、「江戸上り行列図」、「位階と装束」(役人のすがた)、「サーターヤー模型」</p> <p>説明内容:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「薩摩の支配と琉球使節」のところで解説を始める。 ○第二尚氏王統の7代目である尚寧王の治世であった1609年、琉球は日本の薩摩藩(ほぼ現在の鹿児島県)によって侵攻を受け、薩摩藩による支配を受けることになりました。琉球は王国体制を保ちながら、薩摩藩による支配を受けざるを得ませんでした。(注1) <ul style="list-style-type: none"> *「尚寧王御後絵」のパネルを指す。 ・「北京への琉球使節(唐旅)」のところへ移動する。 <ul style="list-style-type: none"> *「琉球使節の主なルート」のパネルを指す。 ○琉球は薩摩藩を通じて徳川政権の幕藩体制下に組み込まれましたが、中国との冊封・進貢(朝貢)関係は維持されました。琉球は、日中の両属的な立場におかれることになりました。 ・「江戸への琉球使節(大和旅)」のところへ移動する。 <ul style="list-style-type: none"> ○その後、琉球は、徳川将軍や琉球国王の代替わりのあいさつに伺う使節を派遣するようになりました。これを「江戸上り(江戸立:えどだち)」といいます。琉球使節たちは、琉球から江戸まで片道約2,000kmに及ぶ旅をしました。ここに、琉球使節たちが行列を組んで江戸城に登城した様子を描いた行列図が展示されています。 *「江戸上り行列図」を指す。 ・「位階と装束」のところへ移動する。 <ul style="list-style-type: none"> *役人の人形模型を指す。 ○次に、この時代の琉球王国で働いていた役人のすがたを紹介します。 ○役人たちは衣裳の細かいところまで身分の差がつけられていました。ハチマチ、かんざし、着物(琉装)などに違いがみられます。3人のなかで、どの人物が最も位の高い人物でしょうか。(答え:真ん中の人物)(注2) ○王府の役人は基本的に士族でした。士族は「家譜」という系図を作成することが特権として認められていました。役人たちは、政治や行政を担い、薩摩による琉球侵攻後の琉球の体制を立て直したり、土木工事を指導するなど様々なことを行いました。 ・「産業と交易」のところへ移動する。 <ul style="list-style-type: none"> ○近世のくらしの例として、人びとのくらしを紹介します。民衆(農民・百姓)たちには、納税の義務が課せられていました。納税の例としては、米、芭蕉布・上布などがあり、ウコンや砂糖は専売的につくられていました。 *「サーターヤー模型」を指して、サトウキビを搾って煮詰めて黒糖をつくっていたことを紹介する。 <p>備考:</p> <ul style="list-style-type: none"> ○注1)薩摩藩による琉球の支配の例 <ul style="list-style-type: none"> ・中国との貿易に介入すること。 ・薩摩藩が許した日本の商人以外と交易をしてはいけないこと。 ・薩摩藩へ年貢を納めなければいけないこと など *「掟十五条」のパネルを参考。 ○注2)「役人の位階制度」のパネルを参考。

通訳案内士ガイド説明資料

順序: 7

項目: 琉球の美

提示資料:

①碑文・欄干の彫刻等

説明内容:

- 1 沖縄の地理的位置(中国、朝鮮半島、日本、東南アジアの中継点)、気候風土(湿潤な亜熱帯)は、琉球の美を育むにあたり、大きな要因です。
- 2 五〇〇年の長きにわたる琉球王国の歴史を経て、琉球の美は今日の姿に完成されていきました。
- 3 琉球王国の形成以前から、沖縄は、中国・朝鮮・日本・東南アジアと関わりをもってきましたが、四〇〇年前の古琉球には、寺院や橋や石碑などが盛んにつくられ、そこには、海外の文化を取り入れながらも、琉球のスタイルを模索する様子がみられます。
- 4 近世になると、布が納められる制度が整えられていきます。特に、久米島・宮古・八重山には、御用布の納税が義務づけられます。また、王府内に貝摺奉行所が設置され、献上品等の漆作品が制作されます。このように、王府の管理下で制作されたことによって、染織や漆芸は、今日の技術が完成しました。
- 5 焼物は、焼き締めを中心とする荒焼と釉薬をかける上焼きの二つの技法がありますが、それぞれ、生活に根ざした焼き物がつくられています。
- 6 絵画、書跡は、中国に学んでいます。絵画を描く絵師たちには、漆器や紅型のデザインを行う者もいました。また、書跡は、士族の学芸として発展しました。
- 7 琉球の美は、豊かな形を持つ彫刻、華やかな色彩を放つ紅型や織物など、アジアへの広がりをもつ絵画、風土の自然を生かした漆器や焼き物などがあり、いずれも中国・朝鮮・日本・東南アジアとの交流の証です。

備考:

工芸の解説によって欠かすことのできない点は次の3点です。

- ①沖縄の気候・風土は、地理的位置が、沖縄文化の形成と発展に切り離すことのできない要因。
- ②外交によって、工芸がさらに発展した。
- ③納税された布が、江戸の町方へも普及したとともに、日本の染織にも影響を与えたこと。

＜資料Ⅳ-3-1 通訳案内士研修用資料 沖縄県立博物館（9/13）＞

通訳案内士ガイド説明資料

順序: 8

<p>項目:「ペリー提督の琉球踏査」「護国寺の鐘」 :琉球王国の衰亡と琉球をとりまく国際情勢</p> <p>提示資料:「琉球を訪れた異国船」のパネル、「ペリー『日本遠征記』」、「ペリー提督の琉球踏査」のパネル、「護国寺の鐘」</p> <p>説明内容: ・「列強の接近と東アジア」のところで解説を始める。 ○次に、琉球王国の末期について紹介します。 ○琉球王国の経済を支える基盤は、農業と特産品の生産、それに中国と日本をつなぐ貿易でした。しかし、度重なる災害や飢饉は農業生産へ大きな打撃を与えました。財政難にあえぐ琉球は、貿易に必要な経費を薩摩藩からの借金で補うようになり、琉球の疲弊はますます進んでいきました。 ○そのような深刻な状況のなか、19世紀半ば頃からイギリスやフランス、アメリカなどの外国勢力が琉球に押し寄せました。 *「琉球を訪れた異国船」のパネルを指す。 ○薩摩藩を通じて幕藩体制に組み込まれていた琉球は、江戸幕府の鎖国方針を守らなければいけない立場にありました。琉球の役人たちは、外国船(異国船)からの攻撃を回避するために、来訪した外国人たちとの対応に追われ、危機的な状況を迎えました。 ・「ペリー提督の琉球踏査」へ移動する。 ○1853年、アメリカの海軍提督であるペリーが琉球を訪れました。目的は、琉球を薪(燃料)や水・食糧などの補給基地にするためでした。ペリーは琉球踏査隊を編成し、琉球各地の調査を行いました。 *「ペリー『日本遠征記』」や「ペリー提督の琉球踏査」のパネルを指す。 ○ペリーは何度も琉球との交渉を行い、ついには1854年に琉球と修好条約を締結しました。 *「亜米利加合衆国琉球王国政府トノ定約 調印書(複製)」を指す。 ○しかし、この条約を結ぶにあたって、琉球は架空の役職をつくって対応したため、条約の効力はほとんどありませんでした。これは、琉球王国のおかれた複雑な立場を示す史料であるといえます。 ・「護国寺の鐘」に移動する。 *「護国寺の鐘」を指す。 ○条約を結んだあと、琉球からペリー提督に梵鐘が贈られました。那覇にある護国寺に保管されていたので、「護国寺の鐘」とも呼ばれますが、正式には「旧大安禅寺鐘」といい、1456年に造られた梵鐘です。 ○ペリーはこの梵鐘をアメリカに持ち帰り、アナポリスの海軍士官学校に保管しました。その後、1987年に沖縄へ戻りました。 ○列強の接近による東アジア全体の状況変化や、1968年に成立した明治政府の方針により、琉球王国は終焉へと追い詰められていきました。</p> <p>備考:</p>
--

通訳案内士ガイド説明資料

順序： 9

項目：「琉球から沖縄へ」

提示資料：『公文録(コウブンロク)』、『沖縄対話(オキナワダイワ)』、『方言札(ホウゲンツダ)』

説明内容：

- ・1867年、江戸幕府が倒れ明治政府が誕生した。
- ・明治政府は近代国家としての出発にあたり、領土確定の必要性を強く意識するようになる。
- ・日支両属状態であった琉球王国を、日本領土とする政府方針が決定される。
- ・1879年、明治政府は松田道之一行を派遣し、自らの方針(対中国国交断絶要求等)に従わない琉球王国を強権的に併合した。
『公文録』『琉球藩を廃し沖縄県を置く』
- ・琉球国王の尚泰(しょうたい)は東京へ移住させられ、王国は滅亡した。首里城正殿は熊本鎮台分遣隊営所となる。
- ・明治政府は沖縄の統治方針として、しばらくは王国時代の諸制度を継承する(旧慣温存)が共通語教育は積極的に行った。『沖縄対話』・『方言札』

備考：(この説明項目を設定した趣旨、説明内容の意味の補足、その他)

沖縄が経験した大きな時代の転換点の一つ(唐世から大和世)で、前近代と近代を区切るものである。

『旧慣温存』：

税制、土地制度、地方制度を王国時代のまま据え置くこと。地元支配層の反発等による混乱回避や税収の確保等がねらいであった。

『日支両属』：

日本と中国の両方に属するという意味だが、厳密には、中国とは冊封・朝貢の儀礼的・形式的関係で、島津には政治・経済・軍事・貿易など、種々の面で島津の統制化におかれ、実質的な支配を受けていた。

<資料Ⅳ-3-1 通訳案内士研修用資料 沖縄県立博物館（11/13）>

通訳案内士ガイド説明資料

順序: 10

項目:「沖縄戦 失われた文化財」

提示資料:『大龍柱(ダイリュウチュウ)』、『致和扁額(チワヘンガク)』、『県立一中からの遠景』、『首里教会の惨状』

説明内容:

沖縄はアジア・太平洋戦争において唯一、住民を巻き込んだ地上戦が繰り広げられた。とくに、日本軍の陣地があった首里は激戦地となったことで、貴重な文化財の多くが灰燼に帰した。

『致和扁額』:

尚敬王(第二尚氏13代、1713～51在位)の手による扁額。1737年に尚円王(第二尚氏初代王、1470～76在位)が即位前に居住していた内間御殿に掲げられた。沖縄戦でアメリカ軍に接收され、トイレの用材として使用された。

『竜柱』:

琉球国王の「王宮」であり、首里王府の行政庁であった首里城正殿の正面欄干の庭前に対をなして置かれていた石造物。1522年に造られた。1660年の正殿炎上、1879年の廃藩置県で破損したが、沖縄戦で大破した。

備考:(この説明項目を設定した趣旨、説明内容の意味の補足、その他)

沖縄はアジア・太平洋戦争において唯一、住民を巻き込んだ地上戦が繰り広げられた。このことは現在、未来に至るまで歴史的遺産の損失といった点からも知っておかねばならない。

通訳案内士ガイド説明資料

順序: 11

項目:「基地と復興」「アメリカ統治下のオキナワ」

提示資料:『高等弁務官旗』、『ナンバープレート』、『B型軍票』、『Aサイン証』、『オフリミツ看板』

説明内容:

- ・1952年4月、三権分立をとる琉球政府が創設されるが、その権限は琉球列島米国民政府「USCER(ユースカー)」により制限された。『高等弁務官旗』
- ・1952年4月28日、サンフランシスコ平和条約により沖縄は日本から切り離され、米軍の施政権下におかれることになった。『ナンバープレート』
- ・米軍は沖縄住民の土地を強権的に接收(1953～)し基地建設をおこなった。基地機能が強化されるなか、米軍関係者の沖縄住民に対する凶悪事件が続発し、米軍機墜落事故や爆音などの被害が頻発した。
- ・アメリカは沖縄において『B型軍票』を法定通貨として定め(1948～58)、日本円に対して割高なレートを設定したため、製造業などの輸出産業が発展しなかった。アメリカからはポーク缶詰やファーストフードなどの食文化や、ロックなどの音楽文化などが持ち込まれ広まった。
- ・基地周辺では米軍関係者相手の仕事で生活をしなければならない人々も多かった。米軍は、米軍人、軍属の性病感染予防や食品衛生を目的に、米軍関係者の立ち入りが許可された飲食店等に許可証(Aサイン証)を発行した。反基地の運動が高まるとオフリミツ(民間地への立ち入り禁止令)を発し、米軍からの収入に頼る業者を困らせた。そして、反基地運動推進家と飲食業者を対立させることで反基地運動の沈静化を図った。

備考:(この説明項目を設定した趣旨、説明内容の意味の補足、その他)

沖縄は戦後27年間にわたり、日本から切り離されて異民族支配を受けてきた。そのなかで沖縄住民の人権は軽視され、沖縄は『太平洋の要石』として軍事要塞化させられていった。と同時にアメリカ的な文化の導入も進み、本土と異なる文化や精神構造が形作られていったことは、沖縄の歴史を語る上で欠かせない。

<資料Ⅳ-3-1 通訳案内士研修用資料 沖縄県立博物館（13/13）>

通訳案内士ガイド説明資料	順序: 12
項目:「新生沖縄県」	
提示資料:「新生沖縄県」砲弾、『復帰記念メダル』、『米軍基地分布図』	
説明内容:	
<ul style="list-style-type: none"> ・1972年5月15日に沖縄は本土復帰を果たすが、県民の願いであった基地の「即時・無条件、全面返還」はかなえられなかった。 ・沖縄の本土復帰を記念して、復帰記念植樹祭('72.11)、沖縄特別国民体育大会('73.5)、沖縄国際海洋博覧会('75.7)が開催されたが、これら政府主導型の記念事業は、植樹祭における天皇・皇后の臨席奏請問題、国体への自衛隊参加問題、海洋博開催にともなう環境破壊と海洋博後の企業倒産・失業増加などの問題をもたらした。 ・日本政府発行の復帰記念メダルは沖縄県教職員組合の反対で児童生徒に配られなかった。 ・戦後65年がたつ現在でも、県内各地で沖縄戦当時の不発弾が発見され、住民が被害を受けている。また、米軍基地も多少は減少したが沖縄島の約20%をしめるなど沖縄の地域開発・経済発展の障害となっている。(壁面パネル) ・近年、沖縄の歴史や文化、自然に対する理解や関心が高まり、スポーツや芸能をはじめとする諸分野での県民の活躍がめざましい。 ・戦前戦後を通じ、沖縄は海外へ多くの移民を輩出してきたが、異国での苦難を乗り越えてきた先人たちとその2世3世によるネットワークがひろがり、世界のウチナーンチュ大会等を契機に地元沖縄や他の地域との交流が広がっている。 	
備考	

※美術館のキャプションを資料として事前研修を実施

しまがた
島形

Shimagata-stone

「島形」は、「山水景石」の一種で、「遠山」とともにひろく愛好されている。海上や湖面に浮かぶ島影を、やや遠望するかのような形姿の石と説明されることが多い。

A-074

やま
山もみじ

Yama-momiji

Acer palmatum Thunb.

Japanese Maple

季節ごとに変化を見せる山もみじは、落葉した冬季には、幹と枝の造型が見どころとなる。なだらかな傾斜の幹から四方へと細い枝を伸ばす本作は、おおらかな姿をかたちづくっている。

A-043

ごようまつ
五葉松

Goyo-matsu

Pinus pentaphylla Mayr.

Japanese Five Needle Pine

自然の風向きによって一方向に流れている木の姿をあらわした、「吹流し」の一作。四本の幹が傾斜しながら層をなし、険しい山岳で強風に耐える情景を想わせる。

ふきなが
樹形：吹流し

Style : Fukinagashi
(Windswept Style)

<資料IV-3-2 通訳案内士研修用資料 さいたま市大宮盆栽美術館 (2/6) >

とおやま しゅくざん
遠山 銘 肅山

Toyama-stone
named *Shukuzan*

自然の景観を想起させる「山水景石」のなかでも、最も親しみやすいのが、山形の石であろう。雄大な山容を望むかのような形姿と趣をたたえた「遠山」は、水石を愉しむうえで、基本中の基本と位置づけられている。

いわがた
岩瀉

Iwagata-stone

一般に「岩瀉」は、海や湖、川の水面に姿を見せた岩礁(がんしょう)形の石と説明されることが多い。「山水景石」の一種として、「遠山」とともにひろく愛好されている。

歳月を重ねた幹肌が印象的な、梅の古木。風格のある姿を見せる本作は、透明感のある青味を帯びた白い花を咲かせる「月影」という品種である。

とおやま ぼん だいさん
遠山 銘 磐梯山

*Toyama-stone
named Bandaisan*

なだらかな起伏をもった形状と、頂上部から裾にかけて走る白い模様を特徴とした一点。雪がうっすらと積もり始めた山の姿を想わせる本石には、福島県の名山である磐梯山の名前が付けられている。

A-068
くろまつ
黒松

Kuro-matsu (Black Pine)

斜めに立ち上がった太い幹が、うねりながら天を目指すかのような、力強い動感に満ちた一鉢。黒松ならではの荒々しい樹皮と、下方へと大きく張り出した枝ぶりが、本作の見どころである。

<資料IV-3-2 通訳案内士研修用資料 さいたま市大宮盆栽美術館（4/6）>

いわがた とうげんき
岩瀉 銘 桃源記

*Iwagata-stone
 named Togenki*

川沿いの岸壁を思わせる石の中央部に、観る者を別世界に誘(いざな)うかのような空間が口をあけている。本作の銘は、この穴の向こう側に、桃源郷(とうげんきょう)を想像して付けられたものである。

どは
土坡

Doha-stone

平原のひろがりゆく様を想わせる形状の石を「土坡」と呼ぶ。「山水景石」の一種だが、実景との直接的な関わりのもとで鑑賞されることは少ない。

A-014

かえで そうしゅん ふ
楓 銘 早春の譜
Kaede named Soshun-no-fu

Acer trifidum Hook.
Japanese Trident Maple

深い切り込みを持つ石に、楓を根付かせた石付き盆栽の一点。岩肌にしがみつくようにして細い幹が複雑な曲線を描く姿は、山奥の溪流の情景を想わせる。

いしつ
樹形：石付き
Style : Ishitsuki
(Rock Growing)

A-062

ごようまつ
五葉松

Goyo-matsu

Pinus pentaphylla Mayr.
Japanese Five Needle Pine

ちよっかん
樹形：直幹

Style : *Chokkan*
(Straight Trunk)

垂直に立ち上がった幹とバランスよく配された枝が、端整な造型美を生みだしている直幹の作。右下へと伸びる一枝が左右の均衡(きんこう)をわずかに崩すことで、ゆったりとした動きが感じられる作となっている。

A 024

真柏

Shimpaku (Japanese Juniper)

根元からうねるように立ち上がった幹に、白色化したシャリがからみつき、観る者を圧倒するような躍動感を生みだしている。厳しい風雪に耐えることで培(つちか)われた、真柏ならではの造型美を見せる一点。

<資料IV-3-2 通訳案内士研修用資料 さいたま市大宮盆栽美術館 (6/6) >

とよやま

遠山

Toyama-stone

自然の景観を想起させる「山水景石」のなかでも、最も親しみやすいのが、山形の石であろう。雄大な山容を望むかのような形姿と趣をたたえた「遠山」は、水石を愉しむうえで、基本中の基本と位置づけられている。

A-033

いわしで

Iwashide (Korean Hornbeam)

落葉したこの時期、あらわとなった根元の力強い造型が印象的な本作は、かつて朝鮮半島で山採りされたものと伝えられている。日本盆栽協会の会長を務めた元首相、岸信介が愛蔵したことで知られる。